

〔書 評〕

ドイツ合理化運動研究の到達点

山崎敏夫著『ヴァイマル期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店，2001年，459ページ，山崎敏夫著『ナチス期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店，2001年，462ページ

守 屋 貴 司

1 はじめに

戦前におけるドイツ合理化運動の研究の優れた二冊の学術書が，21世紀のはじまりとともに，一人の研究者によって世に著された。それは，山崎敏夫著『ヴァイマル期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店，2001年と同著『ナチス期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店，2001年である。

この二冊の名著は，前川恭一・山崎敏夫共著『ドイツ合理化運動の研究』森山書店，1995年，山崎敏夫著『ドイツ企業管理史研究』森山書店，1997年に続く，山崎敏夫氏の「戦前期のドイツ合理化運動研究の到達点」と位置づけることができる。

本書評において，この二冊の山崎氏の著作をとりあげる理由の第一は，この二冊の著作が，マルクス主義理論研究の歴史的分析における優位性を示しうる研究であると考えたからである。東欧社会主義国の崩壊以降，マルクス主義理論研究の社会的退潮が見られたが，本研究はマルクス主義理論的方法の妥当性を明らかにしている。その意味でも，山崎氏の二冊の著作の書評をおこなうことは，意義があろう。

また，この二冊の山崎氏の著作を本書評で分析する第二の理由は，この二冊の著作が，戦前ドイツの合理化運動の解明を通して，「国家と企業（管理），そして市場」間の普遍的問題を分析している点に求められる。国家と独占大企業との関係性は，国家独占資本主義論として，マルクス主義経済学において，研究蓄積がなされてきたが，山崎氏のように，国家，独占資本，独占資本の管理・組織・技術，市場というマクロからミクロに至る関係性を歴史的事実から丹念に掘り起こした研究は希少であり，高い学問的評価が与えられるべきであろう。

以上のような理由から山崎氏の二冊の著作について書評を今からおこなうこととしたい。

山崎氏のドイツ合理化研究と私の研究の「交錯点」を述べれば，イギリス及び日本の合理化問題について研究をおこなってきたという点にある。その点は同時に山崎氏の研究に対する関

心として、本書評を書く大きな動因となっている。それゆえ、本書評では、合理化問題について、考察を加え、自らの糧としたい。

また、本書評では、私なりに、ドイツ合理化運動研究の到達点を確認するとともに、「国家独占資本主義、国家、独占資本、産業別合理化、独占資本の管理・組織・技術、市場」などの関係性について考察をおこなう。そして、そのような分析・考察を通して、今後の山崎氏の研究に対する要望や期待を表明したい。

2 本書の研究課題と研究視角

ここでは、まず、2冊の学術書の研究課題、分析視角について見ることにしたい。

(1) 本書の研究課題

本書評でとりあげる二冊の著作の研究課題は、ヴァイマル期とナチス期における合理化運動について、両時期の合理化運動の全体構造とその主要な産業部門における具体的な合理化の展開過程の究明をおこない、それぞれの時期における合理化運動の歴史的特質と意義を明らかにすることにある。

山崎敏夫著『ヴァイマル期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店、2001年では、その中で、主としてヴァイマル期の合理化運動の分析をおこなっているわけである。この著作での研究課題は、第一に、ヴァイマル期の合理化が、ドイツ独占企業、ドイツ資本主義の復活・発展に果たした役割・意義を明らかにすることと、第二に、ヴァイマル期の合理化過程においてどのような経営方式の発展がみられたのかという点を明らかにすることと、第三に、現代の合理化との関わりでこの時期の合理化運動はどのような歴史的 positioning がなされるべきかという問題を、とくに合理化への国家との関わり、それが果たした役割という点から明らかにすることである。

もう一冊の著作、山崎敏夫著『ナチス期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店、2001年の研究課題では、ナチス期という特殊な時代を取り扱うだけに、より国家との関わりからの分析が研究課題となっている。具体的にこの著作の研究課題を述べると、第一に、ヴァイマル期と異なるファシズム的合理化が展開されるに至る社会経済的背景とともに、国家のどのような関与のもとに合理化がいかに関与され、またどのような諸結果をもたらしたかを明らかにすること、第二に、軍需市場の拡大を基盤に大量生産体制への移行、その確立のための努力の中でそれが実現されたのかどうかを、市場との関連の中で解明すること、第三に、ナチス期と第一次世界大戦後の時期との間にどのような「連続性」と「不連続性」がみられるかを合理化と合理化が展開される諸条件で見ることにある。

以上のように、研究課題設定だけから見ても、本書が経営学の課題を分析することのみならず、経済学の範疇までも研究課題に含めた壮大な構想から執筆されている点が理解できよう。

(2) 本書の研究視角

本書評でとりあげる山崎氏の二冊の著作には、共通する研究視角を有している。

それは、①時期別比較視点、②産業別比較視点、③国際比較視点である。

①時期別比較視点の重要性は、合理化運動の展開過程が、展開する国の歴史的、特殊的、具体的条件によって規定されており、合理化問題を考察するには、合理化が展開される諸条件の変化という点で節目をなす各時期ごとの考察が必要だからである。これは、ドイツの合理化運動のみならず、先進資本主義国に共通する特徴である。

②産業別比較視点の重要性は、合理化の展開過程において各産業ごとの展開にはかなりののばらつきがあり、それを全て同一視して分析することはできないから、産業全体の合理化の共通的要素と各産業ごとの合理化の特徴を解明することが合理化研究において必要だからである。

③国際比較視点は、各国の合理化運動の特徴・性格・構造を知るため上で、欠かせないものであるし、同時に「合理化運動」の本質及び共通性を知るためにも重要な事柄である。

(3) 合理化運動とは何か

ここで少し基本にかえって、合理化運動とは何であるのかという問いからはじめたい。資本主義の危機に対応して、国民経済の再建のための総資本の立場からのひとつの「国民運動」と見ることができよう。先進資本主義各国では、各国の国民経済の危機が深まるとともに、合理化運動が様々な「キャッチフレーズ」をもとに遂行され、資本主義の危機からの脱出がはかられてきた。

合理化運動の中でも、特に、興味深いのが、山崎氏がとりまとめたドイツのヴァイマル期とナチス期にほかならない。それは、第二次世界大戦の敗北、ヴェルサイユ条約による多額の賠償、11月革命という社会経済的背景を持って合理化が展開されたからである。その意味では、そのような時期を21世紀にはいってまとめた山崎氏の研究は学会に対して大きな貢献をなしたと言えよう。

では、それぞれの時期における合理化運動の展開の検討を通して、考察をおこなうことにしよう。ただ、二冊の大著のすべてについて論じることは、本書評の紙幅の関係からも無理であり、本書評では論点を絞って、紹介・検討をおこなうこととしたい。

3 ヴァイマル期における合理化運動の展開

——山崎敏夫著『ヴァイマル期 ドイツ合理化運動の展開』

森山書店、2001年の検討——

① ヴァイマル期の合理化運動の展開

まず、ヴァイマル期における合理化運動の展開について見ることにしたい。

ヴァイマル期の合理化過程は、企業集中、技術的合理化、労働組織的合理化、企業組織全般の合理化（全般的管理における合理化）である。そして、このいずれの領域においても、第2次世界大戦の主要な資本主義国において本格的に導入・普及をみた現代的な経営方式、経営システムの原型をなす諸方式が導入・展開されていることが、本書において解明されている。

そして、ヴァイマル期における合理化の特徴としてあらわれてくるのが、過剰な生産能力を企業集中によってドラッグスティックに整理をおこなう「消極的合理化」であった。資本主義経済の好景気・不景気の経済的循環過程に対応して、独占資本は、合理化運動を通して、資本集中・資本蓄積を繰り返してゆく。この過程は、今日（21世紀）の日本大企業のリストラクチャリングと対応するものである。それゆえ、戦前のドイツ合理化の特徴と戦後の合理化の共通点と差異がどのようにあらわれるかが興味をもたれる点である。

この場合、戦前と戦後の差異として、戦後の経営戦略に基づく合理化と戦前の戦略を持たない合理化に見られる差異や戦後の労働権の拡張における合理化と戦前の厳しい統制下における合理化の差異に大きな興味をひかれる。この点は、山崎氏は引き続き、戦後のドイツ合理化運動の研究を続けられるとの意思をお聞きしており、大いに期待する点である。

(2) ヴァイマル期の合理化運動の帰結

山崎氏は、ヴァイマル期のドイツ合理化運動を、ドイツの独占企業、資本主義の復活・発展にとって大きな役割を果たしたと位置付けるとともに、ドイツ合理化運動の帰結を鮮やかに明らかにし、大きな問題提起をおこなっている。それは、ヴァイマル期の厳しい市場の条件の下で過剰資本の処理が不徹底に終わっただけでなく、合理化の推進によって過剰生産能力が一層蓄積される結果となり、世界恐慌時にいやしがたい生産と消費の矛盾を露呈したとする山崎氏の指摘である。

実際、山崎氏の本書における論述によれば、工業の生産能力の利用度は、世界恐慌後の1929年の70%~75%から1932年には45%に低下しており、経済的な必要な創業度をはるかに下回る事となっている。

このような山崎氏の指摘は、本書の評価を決める上でも重要な論点でもある。すなわち、市場的制約要因がある条件において国家主導の経営管理の近代化・発展をなしえても、かえって過剰生産能力の一層の蓄積を招くだけであり、より大きな世界市場の確保こそ重要であると考えられる。

この点は、戦後のドイツ資本主義の発展や日本資本主義の発展とも重ねあわされる論点であり、山崎氏の研究が、ドイツ合理化運動の歴史的紹介にとどまらず、資本主義論としても優れた側面を有していると言えよう。

(3) ヴァイマル期の産業別合理化の特徴

また、山崎氏の合理化研究の特徴は、産業別に合理化について、膨大なドイツ語の研究資料を丁寧に査読し分析し、明らかにしている点である。私は、常々、この山崎氏の地道な努力と研究姿勢には敬服している。

山崎氏は、産業別の合理化運動の分析を通して、以下の5つの点を明らかにしている。

1. 合理化のおこなわれた企業の操業度が合理化を行わなかった企業よりも低下している。
2. 鉄鋼業や化学工業では、結合経済の一層の進展によって技術的に結合された設備全体の必要最低操業度が引き上げられており、そのため、わずかな景気後退のもとでも生産能力の遊休化が発生しやすくなっている。
3. 重工業ではカルテルやシンジケートの割当日当ての不良投資によって過剰生産能力の一層の拡大がもたらされる。
4. 国民経済に占める重工業の比重の大きさの問題である。ヴァイマル期の合理化の問題は、化学、電機、自動車といった新興産業の合理化によってドイツ資本蓄積全体の体勢を変えることはできなかった点にある。ことに、自動車の大量生産の立ち遅れによる影響は大きかった。
5. 自動車工業の立ち遅れによって、①鉄鋼業では生産規模への大きな影響を与えるとともに、②化学工業に対しては、特にゴム、人造石油などの需要に制約をもたらすなどの影響を与え、③機械製造業では少品種大量生産の遅れによる労働手段調達上の問題がおこることとなった。

山崎氏の産業別合理化運動研究を見ると、個々の産業ごとの合理化が産業の相互連関によって影響されている点がはっきりと浮き彫りにされている。特に、山崎氏は、1920年代のアメリカが、「自動車－鉄鋼－石油・電力」という産業の密接な関連を機軸にする体制に転換することで高度な発展の基礎を構築したのに対して、ドイツではそのような体制への転換を果たしえなかったことを指摘している。

この山崎氏の産業間の密接な関連性の視点は、国家独占資本主義の構造を理解する上でも、解明する上でも重要なポイントである。それは、戦後、日本経済の高度経済成長が、あらゆる産業を有するフルセット産業構造を基礎として発展してきたことを理解する上で重要な示唆を与えうるものである。しかし、1990年代のバブル経済の崩壊以降、このフルセット産業構造の維持がかえって非効率的になり、日本の経済発展を阻害しているとの見解も生まれてきている。この理由についても、山崎氏が戦後のドイツ合理化運動の解明を通して明らかにされることを期待したい。

次に、管理・組織・技術の側面から本書の書評をおこなうこととしたい。

(4) 合理化による管理・組織・技術の発展

ヴァイマル期のドイツでは、企業集中と合理化の推進は、企業組織全体の合理化を必要とし、全般的管理の発展がもたらされることとなった。本書では、合同製鋼やIGファルベンなどが代表的事例としてとりあげられている。

本書によれば、企業集中によっておこった管理の問題は、幾つかの企業グループの合同による効率的管理・統制の問題であった。また、合理化の推進による管理の問題は、各製品ごとの生産計画の策定とそれに基づく効率的な生産の遂行のために、ひとつの集約的な経営単位をなす地域ごとの工場グループに対する分権化がはかられた。

このようにヴァイマル期の企業集中と合理化の推進が全般的管理になげかけた問題は、今日の多国籍大企業の経営管理問題と共通する集約的管理と分権的管理の折衷をいかにバランスよく実施するのかという点にあった。そして、当時の組織革新の目標は、今日の生産問題と同じく、管理の分権化をはかり、一層の専門化をすすめることによって生産現場のイニシアティブの向上をはかることであった。

このように本書は、ヴァイマル期の合理化を取り扱いながら今日の管理問題に通じる問題を分析している点に、優れた点があると言えよう。

また、山崎氏のヴァイマル期の合理化における解明点として高い評価を受けるべき点は、この時期の技術的合理化の解明をおこなったことにある。山崎氏は、ヴァイマル期の技術的合理化の特徴として、1. 労働手段の個別電動駆動方式への転換、2. 硬質合金工具開発とその利用、3. 合成生産方式の普及をあげている。当時の技術の実態を、各産業別に詳しく明らかにし、その限界性を明らかにしたことは注目に値する。

そして、本書において、このような技術的合理化の限界が、ドイツの主要産業に対して、労働組織の領域の合理化を強く求めざる得なくなったことを明らかにしている。そこでの主要な方策として労働組織の合理化をおこなったのが、テイラー・システム、フォードシステムといったアメリカ管理方式である。

本書において、ヴァイマル期におけるテイラー・システムの修正とレファ・システム、テイラー・システムの導入、フォードシステムの導入を明らかにしている。このようなアメリカ管理方式のヴァイマル期のドイツ企業への導入の解明は、経営管理論領域における大きな学問的意義を有している。特に、本書におけるテイラー・システムのレファ・システムへの修正の論述には、大きな学問的関心を刺激される。それは、レファ・システムが、1 テイラー・システムの「最大給付」から平均的な労働者の平均速度を基準とする「正常給付」への変更、2 差別的出来高給の廃止するなどといったテイラーシステムの修正を積極的に起こった管理方式だからである。

次に、ヴァイマル期における国家と合理化運動の関わりについて見ることにしたい。

(5) ヴァイマル期における国家と合理化運動

本書によれば、ヴァイマル期におけるドイツ合理化運動のひとつの特徴は国家の積極的な関与が見られることにあるが、ヴァイマル期には、①合理化宣伝、指導機関への国家のかかわり、②合理化推進運動のための公共投資と産業政策、③社会政策面での関わり、④技術政策面での関わり、が展開されている。

しかし、ヴァイマル期の国家の関わりは、①については、合理化宣伝・指導機関への資金面での関与にとどまり、②、③、④についても、独占企業にとって合理化をより有利な条件のもとで推進することを可能にするためのいわば「外部的な」条件、つまり社会的環境の整備に重点がおかれ、間接的なかかわりにとどまっていると本書では指摘されている。

そして、山崎氏は、第2次世界大戦後の現代の合理化を見ると、国家独占資本主義の機構と機能を全面的に動員した形で展開されており、合理化への国家の関わりは一層直接的なものに発展しているが、20年代のドイツ合理化運動を現代の合理化・合理化運動の出発点をなすものであると論述している。

山崎氏の本書における大きな功績は、上記のようにヴァイマル期の合理化を国家との関わりから位置付け、20世紀の合理化・合理化運動の出発点であると位置付けた点にある。

この点について山崎氏は、ヴァイマル期の政治的・社会的・経済的状況において説明をされている。これは、国家独占資本主義の持つ構造的性格をより明確にする上で重要な指摘であろう。

では、次に、国家による合理化への関与がより深まったナチス期の合理化運動の展開について見ることにしたい。

4 ナチス期の合理化運動の展開

——山崎敏夫著『ナチス期 ドイツ合理化運動の展開』

森山書店、2001年の検討——

(1) ナチス期の合理化運動の国家への関わり

本書（ここでは『ナチス期 ドイツ合理化運動の展開』）では、ナチス期の合理化運動の関わりを、①公共投資の性格の変化と国家による投資規制、②社会政策面での国家のかかわり、③企業合理化への国家のかかわりの三側面から分析している。

① では、産業合理化投資としての性格からの財政上の軍事支出としての性格への変化を分析するとともに、ナチス期の投資規制が軍需生産の増大をはかるだけでなく、巨大独占資本の蓄積を直接促進したことを明らかにしている。

② の点に関しては、ヴァイマル期の労働関係の法制度と社会政策的施策の解体、「経営共同体論」や「指導者原理」のようなファシズム的労働管理の理論的基盤によって合理化を絶対的ともいえる労資協調＝「労資一体化」のもとで推し進めるための条件をつくりだすこ

とになったことを解明している。

- ③ について、本書では、ナチス期の合理化の大きな特徴として、企業合理化への直接的な関与・促進策の展開をあげている。具体的には、合理化を義務付ける「経済性訓令」(1936年11月) 発布やレファ協会への国家機関・半国家機関の関与・協力として指摘されている。

山崎氏は、上記のような3つの側面からナチス期が、ヴァイマル期と異なり、合理化運動への国家へのかかわり、その果たす役割がより直接的になったと述べている。

国家独占資本主義において、景気循環による不景気もしくは恐慌に対する対応策としては、国家的公共土木事業と軍需の拡大の二つがある。ナチス期は、この二つが計画的実行された時期であった。山崎氏のこの大著は、合理化運動の解明を通して、特に、軍需の側面において、国家指導・統制と独占大資本の合理化の整合性と矛盾をみごとに描き出している。

ナチス期のドイツの特殊性は、山崎氏が指摘するように、その社会的経済的背景にあらう。本書によれば、ナチス期は、戦争遂行のために多数の兵士を前線に送り出し、かつ膨大な兵器を消耗したため、労働力不足と原料不足が顕著にあらわれた時期であり、しかも大戦遂行のために早急な軍備増強が必要となった時期である。このようなナチス期の類似性は、戦前の日本に共通する側面であらう。

本書によれば、ナチス期の合理化は、1936年の第2次4カ年計画の始まり以降、急速に拡大している。さらに国家による投資抑制によって、優先的に軍需生産に割り当てられることによって合理化が進んだといえる。この点は、ファシズム経済が合理化運動にプラスに働いた側面と言えよう。反面、ファシズム経済が合理化運動に大きなマイナスをもたらしている。次に、その側面を本書から見ることにしたい。

(2) ファシズム経済の合理化運動に与える影響

本書によれば、定型の多様性、需要変動の激しさなどの軍需市場の特質のために、生産のフレキシビリティを配慮した流れ生産方式の展開が求められ、フォードシステムのような大量生産方式は本格的展開を見るには至らなかった。この点は、ナチス期の合理化の企業経営レベルにおける限界性を示すものである。

また、戦争遂行という政治目的のもとで展開であるがゆえに軍需産業の大量生産は一定の短い期間をもって縮小ないし終了せざるえないだけでなく、自動車のような消費財の大量生産とは異なり、関連産業への経済的効果も小さく戦後に本格的展開を見せるような現代的な大量生産体制の確立をもたらすことはできなかったと指摘している。

この点は、ファシズム経済が、軍需に大きな比率を占有させる反面、民需に対しての比率の低下を余儀なくせざるえないために生じる矛盾であると言えよう。民需の比率低下は、自動車や電気消費財の大量生産の立ち遅れによる大量生産体制の確立の未実現としてあらわれている。

二冊の大著を通しての山崎氏の主張は、戦前の時期においてドイツ資本主義の誕生の仕方と

その後の発展に規定された国内市場の狭隘性という制約条件の「鎖」を断ち切ることはできず、その「鎖」を断ち切りことができるようになったのは、戦後改革による「労資同権化」の本格的確立による市場基盤の形成・拡大という形をとることによって、それまでの市場の条件を根本的に変革することができたという点にある。

山崎氏の研究の重要なフレームワークとして、合理化の生産力の側面とその生産力に対応する市場との関係が大きな位置を占めている。この点が、従来のマルクス主義研究とは異なるオリジナリティな点であり、合理化研究の新たな到達点である。

5 む す び

以上、限られた紙幅の中で、二冊の山崎氏の大著の主たる論点について紹介・論評をおこなってきた。それを通して、山崎氏の研究が、ドイツ合理化運動研究としてはもちろんとして、資本主義論としても、管理論としても、優れた労作であることを確認しえた。また、ドイツ合理化運動研究の到達点として、山崎氏の「国家、合理化・合理化運動、管理、市場の関係性」の主張について整理をおこない、検討することができた。

もちろん、この二冊の大著のすべてを紹介・検討することは、筆者に与えられた紙幅からも不可能であるし、筆者の能力も超えている。それゆえ、筆者の関心にひきつけて、限界の中で幾つかの点について論究をするにとどまった。それゆえ、本書評を読まれて興味を持った方は、本書を読まれることを勧めたい。

すでに、本書評の中で、山崎氏の二冊の大著への要望や今後の研究への期待を述べてきたが、書評の責務として、「むすび」においても、本書についての更なる論評をおこなうこととしたい。

第一に、山崎敏夫著『ヴァイマル期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店、2001年と山崎敏夫著『ナチス期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店、2001年の構成が同じ点にある。ナチス期の場合、国家の合理化への関与がより直接的になった時期だけに、国家による各産業・独占資本、各工場への統制の機構とその役割について述べてほしかった。ナチス期のドイツでは、兵器部門別の中央委員会と供給確保のための中央計画局が創設されている。また、このほかに、陸軍将校と工業会の実務家からなる開発委員会も設置されている。このような委員会、計画局が果たした役割や各種官僚機構がもたらした矛盾を解明することも国家独占資本主義段階にける合理化研究の重要な研究課題と言えよう。もちろん、山崎氏が当初からかけた研究課題は、経営経済学的研究分析であり、そのような国家統制機構の問題は射程にいれられておらず、枠外の点である。しかし、今後の山崎氏の新たな研究の発展において、そのような視野も研究に加えられることを期待することとしたい。

第二に、本書では、生産関係側面の分析が少ないという点がある。この点は、山崎氏の分析視角として、合理化の生産力側面の分析に力点をおく研究のスタイルをとっているためであり、山崎氏が生産関係の側面を見落としていたわけではない。むしろ、生産関係・生産力の問題を

良く知りながら、あえて生産力に力点をおいて展開することで、歴史的な大きな流れを解明しようとしたとも考えられる。

私自身の要望としては、労資関係のみならず、資本側からの運動として合理化運動が展開されていったにもかかわらず、労働者がそれに巻き込まれ、社会システムの（強制的）に社会統合的（半自発的）に合理化運動に包摂されていったプロセスとその構造と機能を知りたかった。そこに、資本主義が存続しうる「鍵」が隠されていると考えるからである。

以上、むすびにおいて、二つの点を山崎氏へのささやかな今後の研究への要望としたい。

いずれにしろ、山崎敏夫著『ヴァイマル期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店、2001年と山崎敏夫著『ナチス期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店、2001年の二冊の大著の公刊が学会に投げかけた問いは大きい。本書の発刊を機会に、マルクス主義的経営経済学的研究が、再び見直され、山崎氏につづく若き研究者があらわれることを願ってやまない。

追記

この山崎敏夫著『ヴァイマル期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店、2001年と山崎敏夫著『ナチス期 ドイツ合理化運動の展開』森山書店、2001年は、山崎氏の今は亡き恩師・前川恭一先生に捧げられたものである。この二冊の「はしがき」の中にも、「前川恭一先生のお人柄」と「山崎氏と前川先生との師弟の交わり」の情景が描かれている。その情景の中にこんなシーンがある。前川先生と山崎氏がほぼ同時期に本を出版され、前川先生が「何よりの幸せだ」と嬉しそうに述べられ、「この本ができたらもういつ死んでもいいんだ」と言う前川先生に山崎氏が「私も今そう思います」と答えられ、握手されるシーンには、大きな感銘を覚えた。そこに、学問にこそ「命」をかける真摯な二人の学者の生きる姿勢があらわれているからである。「師承」という言葉がある。これは、道元の『正法眼蔵』の中の言葉であるが、道元は、「大切なのは、師から何を継承したかにある」としている。山崎氏は、前川先生より学問の魂を「師承」されたようである。

前川先生のご冥福を心よりお祈りするとともに、このような「師承」が縁をもって広がってゆき、爽やかな学会となってゆくことを願ってやまない